
世界をしらない少女

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界をしらない少女

【NZコード】

N9060X

【作者名】

まり

【あらすじ】

狭山 辰徳（35）の前に突然現れたのは、髪をバサバサとなびかせ、ボロボロの服を着て痩せこけた女。

彼女は中学生の頃に亡くなつた初恋の人だつた。

死んだと思っていた人が突然現れたことに戸惑つ辰徳…

彼女は中学生の頃に、義理の父に暴行につながることができたと告白

死を選び、山で亡が死にきれず子供を山の中で出産、山で子供を育てたと訴へ。

そして彼女は辰徳にお願いをする

もつ自分の命は短い、どうか子供を助けてほしいこと。

山の中で育てられた少女、彼女は山の中だけがすべての世界…

戸惑う辰徳だが、少女を救いにむかう決心をする。

この世界をじらないう少女と向き合つ辰徳だか…

たつのことみぶ女

「痛たたた！」

僕は机にむけた体を後ろに反り返す。

「ああ……もつこんな時間か……」

そつづぶやきながら、僕は窓に向いた。

「真つ暗だな……」

時計は午後9時をまわっていた。

「また、遅くなってしまったなー今日はもうやめだーー！」

僕はあわただしく机を片付け始めると、いつものように大きなため息をついて、部屋に鍵をかけて足早に階段をかけ降りる。

「あー、疲れたー」

僕の声が階段に響き渡る、毎度毎度のことだが何で僕ばかり残業なんだよ！

もう誰もいない会社、何となく薄気味悪い…。

長い階段をおりていくと、もう誰もいない会社で一人だけ僕を待つてやつがいる、そいつは一階の窓口にある大きな一枚の鏡とその中に写る僕だ。

「今日も一日お疲れ様、また明日なー」

そう、鏡の中の自分に挨拶をして帰るのが僕の日課だ…。

しかし、仕事終わりの顔に笑いが込み上がる、なんてひどい顔をしているんだ！僕も年をとったんだな。

そして、僕はいつものように車に乗り込み家路を急いだ。

僕の会社から田舎までは、車で30分程度の距離だが……。

いつも街灯もない山道をはしつてこると、同じ道を永遠にまわり続けているのではないかという錯覚におちこる。

本当、田舎だよ。

しばらく走り続けると、ポツンポツンと光が田中に飛び込んでくる、寂しいながらにキラキラと輝く町のあかりだ。

「ただいま……」

そう光にひぶやくのも、いつの間にか田舎になっていた。

光が見えてほどなく、僕の田舎も見えてくる。

今日も一日頑張ったよ本当に、僕は疲れた手つきで車を車庫にまわした。

そして、いつものように、バックで車庫に入ろうとした時。

「ん……なんだ……」

ミラーーー！」に、僕の目に飛び込んできたのは、車庫のすみに小さく丸まつた黒い物体だった…。

「なんだあれ？」

薄暗い車庫の中では、ミラーーー！にそれが何なのか確認する事はできない。

僕は仕方なく車をおりて、黒い物体の確認にむかった。

コツン、コツン…

静まり返った車庫の中に僕の足音が響き渡る…

コツン…コツン

ガサ…！

「えつー・?・うわあ！」

突然動き出した黒い物体に僕は思わず大声をあげる！

「やあやあ」

僕の声に驚いたように、黒い物体が声をあげた。

え…？女性の声…？

人なのか？

「だ、誰だ？」

僕の声に反応するかのように、黒い物体は立ち上がり、その姿はようやく人だと認識できひとまずほっとする。

しかし、こなんか時間に人の家の車庫にもぐりこんでいたやつだ、僕

は自然と拳に力が入った。

しばらく一人の動きがとまる…

「た…たつ…のん？」

先に声をあげたのは相手だったが

え……！い、いま何て…

得たいの知れない人影から聞こえてきた声に、背筋が凍つた…。

たつのん…それは、僕がまだ中学生の頃に呼ばれていたあだ名。

聞きなれたあだ名…

しかし、そう呼んでいた人物はただ1人だけ…

いつも

笑顔で

飛び付いてきた

あいつ…

僕の…

初恋の人

「たつのん…」

再び聞く「」への想。

「や、やめりーだ、誰だー！」

体から血の気がひいていく

闇を覚えるある想…

冷や汗が体を流れ落ちる…

心臓が今にも爆発しそうな勢いで鼓動を打つ

だって

だって…あいつは、あいつは、中学生の時に死んだんだ！

かなえ

僕は、ゆっくりと後退りをする……

それに、合わせるかのようにこちらにむかってくる人影！

恐怖で目がらそらせない……

やがて、僕の体は外の街灯に照らし出される。

そして……彼女も……。

「あ、あああ

次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、髪をバサバサになびかせ、ボロボロの服に身を包まれ全身痩せこけた女性だった。

「たつのん……」

僕の名を呼び続ける女性

その姿は、まるでお化けのようだ！

「ふりかかるな、お前誰だよ

必死に声をふりしぼりながら、彼女を睨み付ける！

「わ、わた、私は…」

かすれた、とてもか細い声…

「私は、か、かなえ…です」

そつと泣いた瞬間、彼女は泣き崩れしていく。

必死でこいつらをみながら、口を動かしていふ、きつと声にならないのだから…。

かなえ…。

間違いない…彼女の名だ、中学生の頃に亡くなつた彼女と同じ名前、前、そして、かすれてはいるが懐かしい声…。

一体どうなつているんだ、目の前の彼女は幽霊なのか…。

「ゴクリと大きく息をのむ……

「う、う……うわあ、う」

目の前で、かなえを呟く女性の姿に口感いを隠せない。

そんな僕の前で必死に涙をぬぐつ彼女……

「か、かなえは……し、死んだんだ！君は一体何者なんだ！」

僕の言葉に反応するかのように、顔をあげ僕を見つめる。

「し、死んだんだ……やつぱり、死んだんだ……」

「……な、何を言つてるんだ！」

彼女が、ゆっくりと近く歩みよつて来る。

僕はその歩みと一緒に一步一歩後退りをしてしまつ。

「死んだん事になつて、当たり前だよね…」

「えつ?」

「たつのこと、かわらなーね…」

「…………。」

何を急に。

言葉がでこない。

「あべりごま、おへ一緒にいたつべたよな

「

「……」

僕はその言葉を聞いてハツとしてしまつ。

確信するしかなかつた…。
間違いない、かなえだ…。

僕の家の庭には、さくらんぼの氣が植られていて、昔よくかなえと一緒に木に登つてたべていた…。

彼女との一番の思い出だ。

「へ、嘘だろ… かなえ… お前、幽霊なのか？」

「やひ、なりたかつた… かな」

「何を言つてゐるんだ…。」

頭の整理なんかできるはずがない、今この瞬間の現状だつて受け入れることも、理解することもできない！

落ち着く事だつてできないが、今僕の目の前には、かなえらしき人が立つている。

「とにかく…中に入らないか？」

僕は何を言つてるんだ！

「いいの？」

でも、このまま逃げるわけにもいかない。

僕は「クリとつなづく。

「わたし、幽霊かもよ…」

「そ、それを今から確かめるんだ！」

僕の言葉に彼女は、涙をためた目で少しだけ微笑んだ。

肩（かた）に彼女の視線を感じながらゆっくりと足を進めていく。

何がどうなつてこるのか。

僕は震える手を必死でかくしながら、玄関を開けた。

「あの……」

ビクッ――

彼女の声に思わず飛び上がる。

「な、なにか?..」

「あの、こんな格好なんですが、おじやましていいんですか?..」

彼女の声がいちだんと小さく、大きく顔をそらしていく。

「……。」

先程とは違い、玄関からもれる光でハッキリと彼女の姿が見えてくる。

「、これは……」

肌は驚くほど汚れて黒く、髪は地面までつたいボサボサと広がり顔をおおつている。

服は…ボロボロすきて、服のかたちをなしていなかつた…。

本当に、かなえなのか？

もし、そうだとしたら…彼女に一体何が？

「ダメ?ですよね

「えつ?」

しまった、思わず黙りこんでしまっていた。

「い、いや、えつと……し、シャワー使います?」

あれ?なにいつてんだ僕は……しかし、確かにこの格好であがられるのね。」

「ここんですか?」

「び、びつだ

「あつがとつ

そう言つと彼女は頭を大きくさげて、スタスターと歩き、僕の横を通りすぎていく。

彼女は迷つことなく、家の裏口に向かっていくのがわかった。

僕はあらためて思った！

本当にか、かなえ…なのか。

彼女は、迷つことなく裏口にあるお風呂場に向かっているんだ。

かなえとは、子供の頃からよく遊んでいて、悪いことをして汚した服を親に内緒で、よく裏口にまわりお風呂で洗っていた。

かなえ…。

僕はバタバタと部屋にあがり、裏口の鍵を開けた。

「あつがとひ

「いや、本当に、かなえなんだな

彼女は「くちりと頭を下げ、鼻をすすつてい
る。

「服、僕のおことへかり

「あつがとひ

そして、僕は自分の部屋へむかつた。

涙

遠くから、シャワーの音が聞こえる…

「かなえ…」

まだ、僕の心は半信半疑だが…

「ふう…」

僕は、服を手に取りお風呂場へ向かった。

「きやー、あつー熱、あつづーあちー…!…!」

お風呂場から叫び声ともとれるような声が聞こえる…

「えつ？ ちょつ！ か、かなえ？ 大丈夫か？」

慌てて声をかける！

すると

僕の声と同時にシャワーの音がとまつた！

力チャヤ…

えつ？

「「あんなさい、うるせかつた？温かいお湯浴びるの久しぶりすぎ
て」

彼女は、ドアを少しだけ開けそこから顔をのぞかせ、苦笑いしてい
た。

「か、かなえ、かなえ、かなえ！」

「たつのん？」

僕は、その場に泣き崩れてしまった…。

シャワーを浴びてキレイになつた彼女の顔は、痩せこけてはいるも
の、間違いなく彼女の顔だった。

「たつのん？大丈夫…」

ハツ？

「着替え、おいとく、僕のだけどつかつて」

そう言つと、僕は顔をあげないまま逃げるよつにこの場を離れた。

落ち着け、落ち着くんだ！

かなえは、生きていたんだ！死んでなんかなかつたんだ！

口から心臓が飛び出してきそくなくらい緊張していた、いろんな気持ちがまざりあってパニックになりそうだ！

僕はふらふらになりながらリビングに座り込んだ。

「たつのん？」

「わああああああああああ！」

「せせせせせ」

僕の驚いた声に、驚いて彼女も叫ぶ！

ふと、気がつくと彼女がシャワーを終えて立っていた！

「び、ビックリした

「は、はやかつたね！」

「えっ？ 結構長くつかわせてもらつたよ」

ま、マジか！時間がすぎたことさえわからなかつた。

目の前に立つてゐる彼女は、先程までとはまるで別人で、髪はタオルでくるみ肌も白くなつていた。

「シャワー…ありがとう」

「い、いや、えっと…適当に座つて」

彼女を見るとまた涙があふれだしてくる。

「飲み物入れてくれるよ

また僕は、逃げるよつたの場をさつた。

僕は、必死で涙をぬぐいながら台所へむかう、落ち着くんだ！落ち着け！

「アハだ、お茶だ、お茶をこねよー。
お茶ーーお茶ーー！」

「お茶、お茶おいかやかやー。おいかやー

「た、たつのん？」

「わあ茶やややややややや

「あやややややややや

ハツーーー

しまつたーーークワーメた思はず言んでしまつたー

「あやややややや

「ハハハハ、ハハハハ」

きょとんとしていた彼女の顔が笑つた…。

「ハハハハ」

そして、僕も一緒に笑った彼女と一緒に笑うのは何年ぶりだろう。

そして、僕らは一人でしばらくの間泣き崩れながら笑いあつた。

生きていた

「かなえ、とりあえず座つて、聞きたい」とだらけだよ

「うん」

僕らはリビングの椅子に腰かけた。

「かなえ、今までどういたんだ？」

「…………」

「…………」

「ナニ、エー？」

「山って……。何を言つてるんだ！」

「あのね、あの…」

かなえは、口を動かしながら下をむいた。

「かなえ、ゆづくつでここから」

かなえは、小さく頭を上下している。

しばらくの沈黙のあと、かなえの鼻をすする音だけが部屋に響いていた。

よほどつらうと思つて思つていたのだ。…。

「あのね、何から話したらいいのかな…」

少し頭をあげては話をうつすが、また下をむく。

そんなじぐさを何度も繰り返す
そして、かなえはまた黙りこむ

僕はかなえが話してくれるのをじっとまつた。

もう何年前になるのだろう、僕が15才の頃だ、かなえとは家も近くで子供の頃からずっと一緒に遊んでいた。

毎朝同じ時間に待ち合わせをして、一緒に学校に通っていた。

その日もいつものように彼女がくるのを待っていたんだ、しかし何時になつても彼女は来なかつた。

その日からずっと…。

僕は毎日彼女を探した、僕だけじゃない僕のまわりの人達も、警察も彼女の両親も…。

でも彼女が見つかることはなかつた…。

それからしづらしくして、警察と両親がかなえの部屋で「死にます」と書かれたノートを見つけてします。

見つからない彼女、まわりの人々は彼女の死をつけいれた。

そして、僕も…。

「あのね…」

「えつ…」

あつ…いけない頭の中が整理できなくて、つい考えいで頭がいつぱいになってしまつ。

「「めんな、どうした?」

それから、かなえはゆづくつと話しまじめる…

父親

「私ね、死のうと思つたの…。」

「うん」

彼女の腕にどんどんと力が入るのがわかる、一瞬でみに震えながら、力一杯拳をにぎっている。

「かなえ、大丈夫か！」

僕はとつさに彼女の手を握つた！

なんて細い手をしているんだ、それにも冷たい…。

「あつたかい」

「えつ？」

「ありがとう」

そう言って彼女はにこりと笑った。

ああ、この顔だ僕の大好きな笑顔だ。

「私ね、あいつに…あいつ、に」

「うん、あの…かなえあいつって？」

ギュッ！

かなえが僕の手を強くにぎりかえしてくれる。

「お、お父さん…」

「えつ？おじさん？」

かなえが大きく頭を下げた。

「あいつは、本当の父親じゃない……から」

「うん」

かなえの本当のお父さんは、かなえが生まれてすぐになくなつたらしく、今の父親は僕らがまだ小さな頃にやつてきた。

「おじさんがどうかした？」

「私は！？」

かなえの声が突然叫び声にかわる！

「私は、あいつにおそわれたの！」

……。

えつ？

今、なんて……。

「私は、お母さんのいない間におそわれたのー。」

嘘だ……。

「あいつこー。」

嘘だ！

だって、おじさんまかぬえがいなくなつた時に本当に心配して、必死でかなえを……。

「それだけじゃない、私はあいつの子供を……」

「子供を……？」

何を言つてこるんだ……まさか、おじさんの子供……。

「うわあああああ」

かなえが大きな声で泣き崩れ、僕は彼女の体を強く抱きしめた！

「かなえ、かなえ…」

嘘だろ…、おじさん！嘘だろ。

こんな事が、こんな事がおきていいはずない！

ちくしょいーーー！

かなえは一體どんな体験をしてしまったんだ！

「うわあああああ、うわあああああ」

「かなえ、大丈夫だから、かなえ…」

のれみ

「ひつぐ、ひつぐ

「かなえ…大丈夫?」

「お母ちゃんには、言えなかつたの」

おばさん、かなえは知らないんだおばさんはかなえがいなくなつたあと病氣で亡くなつてしまつたんだ。

しかし今は、「この話はやめておいで。

「子供がお腹にいる」とがわかつて、私は山に行つたの、死のうつて…思つた…。」

怒りと切なさが込み上げてくる、僕は何も知らず…あんなにいつも一緒にいたのに。

僕は…。

「死ねなかつた…死ねなかつたの」

かなえは、涙をぬぐいながらゆっくり語り話をしてくれる。

しかし、僕はなんと声をかけていいのか正直わからなかつた。

「私ね、さつともいつ長くないと思ひ」

「えつ？」

突然のかなえの言葉、何をいいだすんだ？

「たつのん…私ね子供産んだの」

「ええー。」

「今も私を山でまつてゐ、あの子は山から出た」などが一度もないの

かなえが僕の両腕を強くにぎりしめながら、僕の顔を必死にのぞきこみ強く叫つた。

「お願い、あの子を助けて

「ちょっと、かなえ落ち着いて、山でつて、いつたい何処なんだ？
それに長くないってどうこう意味だよ」

あれ？

「かなえ？」

かなえの体がどんどんと倒れしていく！

「かなえ！かなえ、かなえー！」

「たつのん、お願ひ…あの子を助けて」

かなえの声がひびくなつていいくのがわかる。

「かなえ、しっかりしろ」

「名前は、のぞ…み、場所は…」

声までもどよどよと小さくなつてこく…

嘘だらけかもしれない普通に話してたじやないか…

「かなえ、まつてり今救急車呼ぶから」

立ち上がりつつある僕の腕をつかんでくる彼女…！

「場所は…」

「かなえ… わかつた、場所どー?」?

小さくなる声に僕は必死で耳をかたむけた。

「必ず助けに行くから、だからかなえ病院にいー」「ー」

突然じすつと彼女の重みが体にのしかかる!

「かなえ?かなえ!」

だらりと力がぬけている手を握りしめる!

「嘘だろ、かなえしつかりしろー!」

意識をうしなつてゐる!

僕はあわてて救急車をよんだ。

病氣

静かに時がながれる……。

かなえ……。

僕とかなえは、近くの病院にいた。

「辰徳」

声の方に顔をむけると、僕達の同級生でもある山本が立っていた。

「辰徳、彼女は一体誰なんだ？」

「山本先生、あいつ助かるよな」

山本はこの病院の医者で、かなえのこともよく知っている。

「先生はやめろ、それより彼女に見覚えがあるんだが、カルテの名前も…」

「山本…」

「まさかな、幽霊でもつれてきたのか?なんて…」

「かなえだよ…」

二人の間に沈黙がながれる。

「しかし、彼女は亡くなつたはずだろ」

「僕も…驚いた。」

山本が頭をぐしゃぐしゃとかきはじめた。

「山本、僕ちょっと行かなくっちゃ……」

「おー、ちょっと待てよ」

僕はふうふうな足でゆっくり立ち上がり、山本に深く頭を下げた。

「かなえとの約束なんだ、必ずもどってくるからそれまで彼女をようじくお願ひします」

「お、おー辰徳

僕は頭を上げて歩き出す。

「かなえ……必ずつれてくるからまつてろよ。

「はあ、あいつ大丈夫なのかフランフランじゃないか！しかし、彼女は

……」

僕は病院を後に、のぞみちゃんがいる丘へむかった。

山

僕は車を走らせる。

辺りはほんのり明るさをとりもどしてきていた。

頭がもうひとつする、街を離れてどれくらいたつだろう、かなえはこんな遠くから歩いて来たのだろうか？

かなえが倒れしていく中で、必死で僕に伝えようとした場所だが、本当にこんなところであつてるのだろうか。

「確かに…山だな」

はつきりした場所まではわからないが、一いち辺から登つてみると

僕は車をおりて中にのぼれそうな場所を探した。

これは、何か印をつくること帰つてこれなくなるよな。

僕は木に印をつけながら山の奥へと進んでいくことにした。

「のぞみちゃん、聞こえるかー」

くそ、草や枯れ木に足をとられる！ 傷だらけだよ。

「のぞみちゃん

一体どこにいるんだ？

僕はがむしゃらに山を登つてこく、早く早く見つけなくてはー！

ガサガサ！ ガサガサ！ 「いてつー！」

「のぞみちゃん、いたら返事をしてくれー」

辺つて響を渡る僕の声は、何の反応もなく時間だけが過ぎていった。

「のや……へやおー声もかすれて出てこないー。

それでも僕は必要で彼女を探しつづかる。

辺りが少しずつ暗くなってしまった。

「嘘だろ、やつをまで呟のかつたのこー。

」

必死になっていたからわからなかつたが、僕は山に入つてどれだけの時間がすぎたのか？

はつーしまつた！

僕としたことが、時計も携帯も車においてしまつた！

「なにやつてんだ僕は……へやおー。」

体にあたる風が少し肌寒い…。

簡単なことじゃないのは理解していたが、こんな山の中、下手したら僕が死んでしまうんじゃないかな！

いかん弱音をはくな！しつかりしろ！負けてたまるかー！

「はあ、はあ、」

あれ？

氣のせいだろうか、あそこだけ草が倒れて道が出来ている気が…！

明らかに不自然に倒れた草木の道は、まだ新しくできたよつな、こんな所人は通らないだろうし？

ひょっとしてかなえ…かなえが作った田印だろつか？

いやしかし、まさか！熊か猪のたぐいって可能性も…

考えてる間にも口はドンドンと沈んでいく…今は考えてても仕方がないな、僕は獣道に迷って山をのぼった。

「はあ、はあ、はあ、」

あれから何時間歩いただろう、体力も限界をむかえようとしている。しかも、この獣道いつに終わりがみえてこない…

くそ、どこにいるんだ！　だいたい普通に考えて見つかるはずなんかないんだ、こんな広い山の中…

心があれそつだー！

「はあ、はあ、はあ、水…」

「かなえーのぞみー…!」

意識がもつれりつする…。

僕はその場に膝まずいてしまった。

「… も… も」

えつ？

今のは、人の声じや…!

遠くの方からかすかに人の声らしきものが聞こえた気がする…。

僕は目を閉じて耳に集中する。

声の先

サラサラ、サラカラ

風にゆれる草木の音「ま、…ま」やつぱり人の声…

「のぞみちゃん!」

僕は無我夢中で叫んだ!「のぞみちゃん!」

あいつのかなえの娘に間違えない!

僕は声のする方にむかって走った、草木が激しく顔にぶつかる…

「くそ、邪魔だー!」

「のぞみちゃんーんーどーだーー!」

声が聞こえない！

かなえ以外の人間を知らずに育つたんだ！
僕の声にビックリしているのかかもしれない！

それでも僕は叫び続けた！

「のぞみちゃん
えつ？」

「うわあああああ！」

突然足元から崩れ落ちる！

嘘だろ！

「うわあああああ！」

何がおこったかわからない！

ただ僕は逆らいぬ」となく山を転げ落ちていへ！

「うわあああああ！」

ザザサササササササ！ザザササササササ！

ドス！

「うわああああ！」

いた。

「アーリーが…アーリーが…」

見つけた

「かはあ…」

あれ？僕は？

いててててて！

体を動かそうとするが、全身に電気がながれるような痛みがはしる。

僕は…。

目を開けているのに、何も見えない！

「漆黒の闇か…」

。かなえはこんな真っ暗な中で生きてきたのか…

かなえ…。

「かなえ――――！」

とてつもない恐怖におそわれる！

真つ暗な世界！

聞きなれない闇の音！

怖い！

ガサガサ！

「…………！」

ひたいから冷や汗が流れ落ち、全身震えが止まらない！

何の音だ！熊……か？鹿か？猿か？

僕の頭は恐怖でいっぱいになり、ただただ怯えることしかできなかつた。

たのむ、こないでくれ！こないでくれ！

ガサガサ！

ガサガサ！

「くそ！」

ガサ！

音が頭の上まできて止まつたのがわかる。

「へへ」

僕は思わず口をグッと閉じた！

「マムの……お前、何で」

えつ？

驚きと共に口を開ける。

雲間から円明かりがやっこむ…。

人？女の子！かなえと同じ姿！

僕はあわてて体をおひそつとした！

「ついだだだだだ」

「やややややや」

ガサガサガサガサ！

しまった、脅かしてしまった！逃げないでくれ！

「のぞみちゃん、のぞみちゃんなんだろ？」

ガサガサ

「なぜ？私の名前……？」

やつぱり。

「よかつた！ よかつた――――！」

ガサガサガサガサ！

「わわわーー！」めん逃げないで

思わず大声をはりあげてしまい、彼女をおどろかせてしまつ。

「ママに、かなえに頼まれたんだ、君を迎えてきたんだ」

「むかえ？ むかえってなに？ ママは？」

聞こえるか声が震えてるのがわかる！

「お前なごみた」となご形?・ママはっ。」

「僕は、君のママ友達なんだ、かなえたのまれて君を助けてき
た?」

「友達? 友達違う、だってみたことないー。
私達と同じ姿? でも違う」

違つ? そつか、男の存在もわからないからなのか?

「動物達とも違つ? ママはっ。」

「のぞみさん、僕と一緒に繕う? もういいやつ

「…ママのことをいいやつってやつ?」

「あー。」

「うつまつて僕は、ポケットに手をこれる。

「いてててて、ああ怖がらないでー。」

「これみて

僕がポケットから取り出したのは、かなえが持っていたのネックレスだった。

彼女がお風呂に濡れてた物だ。

「ママのママ……」

彼女が僕に飛び付いてきた！

「アハ、ママのママのママ！」

僕はこいつと笑った。

「マ、マ、マ、マ、マ、マ

「う、う、う、う、う

やつらって頭をなでる。

やつともみつけたよ、かなえ。

居場所

ああ、まさか本当にいるなんて。

正直未だに信じがたい事だらけだ！

しかもこんな広い山の中、見つかるなんて奇跡としかこじょうがな
いよ。

あとは向とか山を下りなければ！

しかしまいったなあ…。

せつかくつせたてきた田印も、崖からおひたら意味なこと。

この田明かりも靈にかくれれば真っ暗だ！

「お前、なんだ？」

えつ？

彼女がまじまじと僕を見ている。

「何つて？ そう聞かれるとなんて答えたらいっこんだ」

僕はクスリと笑う。

「お前、似てるけど私達と違うー。」

ん~！ やつぱりきっと男女の違いを言いたいんだろうな……。

簡単に説明したって理解なんかできないうちにさ~。

ペタペタ！

「ないー。お前にせこれがついてないぞー。」

そう言つて彼女が服をまくりあげる！

！――！――！

「わあわあわあ――――――――――――

僕はあわてて服をさげた！

「な、なんだ？」

なんだじゅわあーい！

ああ勘弁してくれー！

彼女の世界は本当に、かなえと自分といこに住む生き物だけがすべてなんだな。

「まあ～」

「？？？」

やせつゝ田中早矢香をねつて、かなえのもとへ連れてこいつへ。

体は痛いが、足も手も動かせる。

「あのやのんみちゃん、じるじるだかわかるかな？」

「じるが、山だ。」

「うんそうだね！」

「アリなんだかじり、のんふかやんせ！」がどじうかわかるの～。」

「わかるよ？」

「みじみじー・みかつた。

「それとさ、僕さっこしこ落ちる前にのぞみちゃんの声聞いたんだ、
のぞみちゃんも僕の声聞こえたよね？」

彼女は「ククク」とつなずく。

「その場所まで帰りたいんだけど分かるかな？」

彼女はまたコクコクとうなづく。

「よかつた——！」

「いだだだだだ！」

ビク！ 彼女が飛び上がる！

「ああいめんな、驚くよな

僕はゆつくつと体をおこした。

くうへこでえー！

「そこまで行きたいのか？その体でいけるのか？」

「大丈夫だよー！」

「わかった、すぐ近くだしついてきて

えつ？

「近いの？」

「そう、すぐそこーついてきて

そう言つて彼女は歩き出す。

「あ、まつて！ いだだだだだ

僕はあわてて彼女の後をおつた！

印

「ねえ、もうだいぶ歩いたけど後悔はしないかな？」

僕の足腰が悲鳴をあげている。

「もう少しだー！」

もう少しつづ…

彼女の距離感に嫌な予感がしてきたぞ。

僕は必死で彼女の後を追いかける！

そんな僕をよそに彼女はぐんぐん進んでいく！

「ちゅうと、まつてー！」

100

「くそおー、追い付けない」

負けてたまるかあー！

ドン！

「いた！」 「いたあー！」

突然の衝撃、どうやら僕は彼女とぶつかってしまったようだ！

「ごめん暗くて下ばかり見てたから止まってくれてたの気付かなかつたよ」

「?/?/?なにいつてるの、あれをみてただけ」

あれ？

彼女は真っ暗やみに手をむけているが、僕に何のことだかわっぱり分からぬ？

「もしかして、何かいるの？」

「なにいってる？ あれだ！」

「ああ、僕には1メートル先もみえませんが……。

「あれと、同じものが家まで続いてる、あんなのこの山の動物はできない、きっとママが作ったんだ！」

ひょっとして……。

「獣道のことをこいつてるの」

「獸道、なにそれ？」

「あ、えっと…草木が倒れてできた道だよ」

「みち？」

道も通じないか～！

「わっ さからり何を言つてゐるの？.」

ん～？

「ねえ、そこまで連れていいつてくれないか？」

「連れていく？自分で行けばいいじゃないか」

「僕には見えないんだよ」

「ええええええ！見えないのか？」

「クククと僕がうなずいてると、彼女が不思議そつな顔をしてくる。

「いいひちだ」

そう言って彼女は僕の手をとつ歩きはじめる。

こんな環境で育つと暗くとも田がきくんだな。

「ほら、見えるか？」

「ああ、あいつがとうとうまで来ればやみえるよ」

やはりこの道はかなえが作った道なんだな、あいつに僕に彼女の居

場所を教えるために。

「のぞみちゃん、上り坂の辺りになるのかな？」

「どの辺り？私の家よりだいぶ下の方だな」

下の方…。

「本当にママには絶対行つてはいけないって言われてるんだけど…」

僕がこの道を見つけたのは、山に登つていいく途中からだが、彼女は僕がいた所まで近いと言つていたよな。

だとすると、方向的にあっちか一

「あのね、むしろの辺りに傷がついた木があるはずなんだけど…探すの手伝ってくれない？」

「傷…あれか？」

彼女まっすぐに指をさしてくる。

ええええええーおやか?こんな所からは見えるはずがない!

しかし、方向的にはあつてこいつてみるか!

「それにつれてこつてほじー!」

「わかつた…」

僕は彼女の示す方へむかって歩いた!

一歩（福井県）

お歳に入りにしてくれた方々ありがとうございました。

すみません、13、14部編集でかなり話がずれてしましましたー。

いろんな内容でもよろしくだれか々あつがとうございました。

一步

彼女が指さす方に歩き続けてどれだけたつだろ？。

いつたい彼女は何処を田指して歩いているのか？

すると、突然彼女がはしりだす！

ちよつとまつて！足場も悪くつまく走れない！

「ほり、これだ！違つか？」

「えつ？どれ？」

僕は木へと近づいて確認する。

。

嘘だろ…。

奇跡だ！

間違いない僕がつけた傷だ！

信じられない、あんな遠くからこの傷を見つけるなんて…。

僕はこんなに近づいてようやく見える傷なのに！

「なあ、あれもか？あそこも…。」

彼女が次々と指をさしていく。

。

すいじー、すいじことしかにいようがない！

なんとなくだか方向的にあそこいら辺だと語つことはわかる！

「えっと、上の方向じゃなくて下の方向の木で印があるところについていつてほしい！」

「一九四二」

よしー希望が見えてきたーこれで無事山を降りる事ができるー

「おみださるさんटーイ！」

「ああ！会えるよ！」

「わかつた！こつちだ！」

そう言つて彼女はまた僕の手をとり歩き始めた！

卷之二

ゼル—ゼル—！—！—！

モーニング

ドス！

「いてっ！」

彼女の動きが突然とまつた！

「どうしたの？」

h
?

震える？

そうだよな、こわいよな、怖くないはずがない！彼女にとつてここから先は道の世界！

僕は繋いでた彼女手をぐっとござりしめる！

「大丈夫！」

「えつ？」

そして僕は彼女の前に一歩踏み込む！

「ここからは、僕が前に行くよしつかりついてきて

彼女の表情は暗くてわからないけど、繋いだ手を通して彼女の気持ちが伝わってくるようだ！

今までの道を通つてきてなんとなく先がよめてきた、それによく足下を見てみると草木が倒れて、小さな獸道ができる！

これは僕がつけた足跡だ！

もう少し、もう少しだ！

かなえ！

僕は大きな一步をあるきだした！

山の終わり

「のぞみちゃん、ここを抜けたら山は終わりだから」

「山が、終わる？」

「そう、山が終わる！」

「よく意味が分からぬい？ 山に終わりなんてないだろ？」

「そうだよな、僕も突然ここで地球が終わりますよ、なんて言われても理解できないだろうな、その先なんて想像すらつかない世界だ。」

「とにかく、山は終わるけど大丈夫だからー」わがうずく僕を信じて

「ははは、変な事言つなー！」

あれは、外の景色…ようやく見えてきた！

「ほら、のぞみちゃんあそ」が出口だ

「出口……？」

しかし、本当によかつた！無事に帰つてこれたんだな！

彼女の足がピタリと止まる。

僕は彼女の手を強く握りしめた！

「大丈夫こわくないよ、ついておいで」

僕の目でも確認できる、草木が終わり人工的な道が始まろうとして

「この、この世界彼女の皿はまだついてこないのだろう。

「た、つのん…」

「えっ、今なんて?」

「たつのん…」

「どうして君が僕の名前を…」

突然のこと驚いてしまう。

「思い出したの、ママがいなくなる前に「たつのん」って人が来た
うついていきなさいって」

「かなえが…」

「ママが何を言つてるかわからなかつたから忘れていたの、あなた

がママの言ひてるたつのんなの？」

「ああ、そうだよ」

「アヤシ」

「ある行為」

彼女は僕の腕をつかみピタリと横にはりついてくる。

「大丈夫だよ、ママと僕を信じて」

僕はそう言つて彼女の頭をなでた。

だんだんと草木はなくなり、田の前に道があらわれる。

「これ、何？」

「ん、これが道って言うんだ、この道がのぞみちゃんのママの所までつながっているんだよ」

彼女はそっとしゃがみ道路をさわる。

「小さな石がかたまって、大きな石になってる」

初めて見る道路か…これから見る物はすべて初めて見るものばかりだろうな、大丈夫だろうか？

さて僕の車は、あそこか。

「のぞみちゃんきて、いくよ」

「えつ?うん」

彼女はそろりそろりと、道路を歩く。

すると、突然彼女が僕の後ろに身を隠しそうと指をさす。

「ねえ、あ、あれなーっ。」

「あれは、車ひいてしまつんだ」

「へ、る、まっ。」

「モツ、車、今からあれこのんだよ」

「のね。」

「モツ、乗るー。」

「わこのだらしがっ。彼女がよつぱタコとせつこでしきれこ。」

「やく車に乗れるのかー。かなえまつてくれ、モツして貰える
からなー！」

説明

僕は彼女と一緒に助手席へむかう。

ガチャ

「さあ乗つて」

「…………。」

やつぱり、思つた通りの反応か。

「お前は、太陽をつかまえたのか？」

太陽？

「すごい！」

突然彼女が車に飛び付いていく！

「お、おー？」

「ビームだ、ここか？」

彼女が必死で 車内のライトを指差している、太陽…光か！

これは、いちいち説明していくのも大変だな。

「のんみちゃんとりあえずここに座つてもいいえるかな？」

しばらくの間、じつと席を見つめた彼女は警戒しながらけわしい顔で、ゆっくり腰をおろした！

「わあわわわわわわわわ！」

「ふつ！」

「ん？ 何がおかしい

「いや、さあなん」

さて、僕も車に乗るか！

いや……その前に。

僕は車においていた携帯を手にとった！

うわあ、すばらしい着信だな！

「まいつたな……」

「どうした？」

「えつ？ いやなんでもないよ」

そう言って僕は苦笑いでかえす。

電池もギリギリだな。

ピッピッ…、プルルルル、プルルガチャ

「あ、もし…」「辰徳！――今どこにいるの？？」

電話の相手僕の姉だ。

「もしもし、何があったの？」

「会社から電話あつて、連絡もとれないし？何があったの、もしもしー。」

「ちよつ、姉ちゃん落ち着いてー電池ないんだ、詳しく述べて話すよ、悪いけど今すぐ家に来てほしい」

「えつ？今から元氣あんた

プツン。

やつぱり落ちたか！

「なあ、大丈夫か？」

「えつ？」

ふと横に顔をむけると、鼻がくつつきそうになるくらい、彼女が僕をのぞきこんでいた。

「うわあ、大丈夫…って何が？」

「一人で何か言つてたから」

「あ…ああ大丈夫だよ。」

「なあ！」

「なに？」

彼女はボサボサの髪をかきわけながら必死で辺りをみ見渡している。

「太陽どうやってつかまえた？」

はは、これから質問攻めで大変そうだ。

「 のんみちゃん、今からもひとつ、もひとつずつじこじをおじるか?」

「 あーじる?」

「 そう、だけど今は時間があまりないんだ、あとから説明するよ」

「 セリフ?」

ガチャ、ブルルルル!

「 もやあああああ」

車のエンジン音に驚く彼女、これからおじることに彼女がどうなるか、なんとなく予想がつくが…とりあえず僕は車を走らせた。

町の明かり

「…せせせせせせせせせせせせ」

「せせせせせせせせせせ」

うう、耳がつぶれそうだ――――――――――

わかつてはいたんだが……。

「…せせせせせせせせせせ」

初めて体験する車、初めて体験するスピード、そりゃこわいだらうな…。

しかし、耳が痛い。

「わわわわわわわわーー！」

「……………。」

「……………。」

ん？突然彼女が騒がなくなつた。

「大丈夫？」

彼女の顔をのぞきこむように見る。

「小さな太陽がいっぱい、いや、夜だからお月様なの？それともお星さま？」

ああ町の明かりか、そうだなるで陸にある月や星たちのようにみえるな、いつも見慣れた景色だが今日は違う景色にみえてくる、や

つと帰ってきた。

「のぞみちゃんあの光の所にママがいるんだよ」

「えつ？ 本当に？」

「ああ、もうすぐだ。」

アクセルを踏む足に力がはいる、本当に無事に帰つてしまつてよかったです。

時間は、深夜3時お姉ちゃんこんな時間に呼び出しても怒つてるかな。

僕は直ちくと車を走らせた。

家族

僕たちはようやく血筋につくことができた。

さて、と。

「のぞみちゃん少しの間だけここにいてくれないか？」

「うーん。」

「そう、こわくないから絶対にこの中からでないでほしい、必ずま

た僕はもどってくるから」

彼女が「クリと頭を動かす。

「すぐもどるからね。」

僕はそつと車を飛び出した！

一応ロックかけとくか！

僕は彼女に手をふり、一足先に家にむかつた。

ガチャ。

「ただいま、姉ちゃんいる？」

バタバタ！

「辰徳……！」

「うわあ姉ちゃん声でかい、何時だと思ってるの？？」

バタバタ。

えつ？

「夙徳……！」

「母さん、父さんも来たのか？」

「とても心配そう」、姉ちゃんにかんしてはとても怒ってるみたいだ
な。

「あんたね、なに考えて」

「ストップ……！」

僕は姉の言葉を止めた。

「な、なによ？」

「いい、ビックリしないで聞こえてほし、今からひとつずつすべて
事実だから」

みんな真剣な顔で僕をみている。

そして、僕は今までのことを簡単に説明した。

「……なにしているの？」

一番最初に口をひらいたのは姉ちゃんだった。

「今、彼女は車で僕がくるのを待っているんだ

「本当に、かなえちゃんの？」

「ああ、あなた間違いない！」

母さんはポロポロと泣き出した。

「母さん、大丈夫?」

とつさに姉ちゃんが母さんをささえる。

「彼女は、山を今まで一度も出たことがないんだ、人間もかなえ以外は知らない、とにかく何も知らないんだ」

信じがたいと言わんばかりに親父が首をかしげている。

「あまり一人にはしておけないからつれてくるよ、姉ちゃんお願ひがあるんだ」

「な、なによ?」

「彼女、多分一度も風呂に入った事ないとと思うんだ、今の格好も見たらビックリすると思つけど、彼女をお風呂にいれてあげてほしい」

「わ、わかった」

「とにかく連れてくるよ

」やつ言ひて僕は足早に車に向むかつ。

車にむかうと彼女が僕を見つけて窓にへばりついて立った。

ガチャ。

「お待たせ」

髪で隠れてちゃんとした表情はわからないが、ビリヤウ支心しててくれたみたいだ。

「ああ、おつて僕につづいて」

彼女はゆっくつと車をおつて辺りをキョロキョロ見回していく。

「ここはね僕の家だよ

「ええええ、家？」これが家なのか？」

「ああ、それとね家には僕の家族がいるけどみんなママの事を知つてこるからこわがらなくていいからね」

「かぞく？」

ん~やつぱりハテナでかえつてくる言葉は意味がわからないのだろうな、とぐにかなえは家族なんて言葉は使わなかつたんじやないだろうつか…。

「とにかく」わくないし、大丈夫だから」

彼女首をかしげながら口クリとつなぎいた。

大丈夫だろうか…。

話をしている間に玄関へとたどりついた。

「わああああ

「わああああ

すべてが不思議な世界なんだろう、彼女は首がとれるのではないか
と思つほどキヨロキヨロとしながら驚いている。

ガチャ

「連れてきたよ」

彼女がとつそに僕の後ろに姿をかくした。

「大丈夫だよ」

ゆっくつと、僕の背中越しに顔を出す。

それを家族が驚きの表情でみていく。

「母さん、姉ちゃん、父さんも彼女がこわがるから

「ああ」「めんなさい、あがつて、えっと」

「のぞみだよ

母さんがゆっくり僕たちに近づいてくる。

彼女は僕の腕を強く握りしめる。

「のぞみちゃん大丈夫だから

母さんがゆっくり彼女にふれて微笑んだ。

「え、ママとい？」

「ママで早く会いたいね、のぞみちゃんおばさんほんまあなたのがママと遊んだの？

「あ、だから」わがらなくて大丈夫だから

「うつむいて」「うつむいて」と微笑んだ、もすがだな…母親つてやつよ。

すると姉ちゃんがゆっくつと手をのばしてきた。

「の、みちやんにほいんで、こわくないかい？」

彼女はすっと姉ちゃんの手をみつめつくる。

姉ちゃんも動かすにじつと手をだし続ける。

すと彼女はゆっくつと姉ちゃんの手をとった。

僕は思わずホッとした。

「のんみちやん、そのままママの所にいけないんだ、少し……み
ず、水浴びしてきてくれるかな？」

「水浴び？ 離はるのか？」

よし、通じた！

「離はなれりなこなび、水が玉ねりじらがあるから

「えつへんうなのか？ す」

「それから……」

姉ちゃんがゆくつ髪をかきわけながら話しかかる。

「髪も切つていいかな？」

「髪をあらへなんでだ？どうやつてきるんだ？私もずっと思つてた、お前たちは何で髪が短いんだ？」

「みんなね、髪を切つてるから短いの、のぞみちゃんも少しだけ切つてみない」

「どうやら彼女は一生懸命考えこんでいる。

「それは、痛いか？」

「大丈夫痛くないよ

「わかった、いいよ」

みんないつせいに安心する、確かに彼女の髪は床につき、バサバサでとてもこのままにはしておけない状況だ。

「辰徳ハサミ用意して！それから先に彼女をお風呂場までつれていつてあげて」

「あ、ああ、わかった、行くよのぞみちゃんついてきて」

そして、僕たちがお風呂場へむかつた。

「うるさいよ」

彼女はキョロキョロと辺りをうかがつ。

「いいにおいだ、こんなにおこの花もあるんだな？初めてでね。でも花はどうにあらんんだ？」

花？石鹼の香りを言つているんだな。

「のぞみちゃん、これは石鹼の香りだよ」

「せつけん？なんだそれ？」

僕はやつきからずつと考えていた、生まれた時から当たり前のよう¹に使つてきた物たち、いざ「何か？」と聞かれたら返答にこままる。

そして、その大切さが忘れてしまつてゐる。

「なあ？せつけんてなんだ」

「えつ？ああ」めん考え事してた」

バタバタ。

あわただしく足音が聞こえてくる。

「のどみぢやん、お風呂の前にこれ少し飲まない？」

やつぱり田舎さんがジースをもつて来る。

「ああ、めぢやめぢや喉乾いてたんだよ、よくよく考えたら山から
何も口にしてないんだ！」

「やっぱり、のぞみちゃんお風呂は汗をかくから水分をとつっていた
ほうがいいわ、はい！」

彼女は僕の顔をのぞきこむ。

僕は母さんからジュースをうけとり一気に飲み干した！

「うまー！ほらのぞみちゃん大丈夫だから飲んでみて

「はいどーぞ

彼女はゆっくりグラスをうけとけ口をつけける。

「冷たい！！

彼女の顔が凍りついた、そとかこんな冷たい飲み物も初めてだよな
！

「大丈…」「あまああああああああい…!…!…!…！」

ビックリした…!…!…!

突然彼女が興奮して叫ぶ！

「なんだこれ？美味しい！」

「そう、よかつたお風呂上がりにまた用意しておくから」

母さんの言葉に首をかしげる。

「あとから、また飲めるって」

「本当に…!…!…!…いいのか？」

彼女は嬉しそうに飛び跳ねた！

「母ちゃん、彼女はこの世界を全くしらなーから、ちよこちよに理解出来ない言葉があるんだよ、だから彼女と話す時は言葉をえらばなくちゃいけない」

「さうね、つこ普通に話してしまつか

「お待たせー、あい母さんびひつたの~」

姉ちゃんが服をもつてやつてきた。

「ジユース持つてきてくれたんだよ、それより姉ちゃん、彼女お風呂初めてだからお湯にビックリするとと思つて、『氣を付けてあげて』

「わかった、じゃああとはまかせて、良徳はハサミ用意して脱衣場におこしておこして

「ああ、わかった

そして、僕はお風呂をはなれる。

姉ちゃん、大丈夫だろ？

シャワー

「じゃあ入る？」「まづは服を脱いで」

「わかった」

そう言つと彼女は服をゆっくつ脱いで丁寧に床におこした。

「えっと、あがつたらこれに着替えてね」

「きがえる。」

「こや、えりの服を着ていい？」

やつて私は服を見せた。

彼女は目を丸めて驚いている。

「いいのか？こんな綺麗なの着ても

「ここよ、ここで使って」

彼女が嬉しそうに服をながめている、それにしても……なんて体、痩せてるもの気になるけど身体中傷と虫刺されのあとがすごい。

「どうした？」

「向でもない、じや、ここにきて

私はゆつべつシャワーをひねる。

「わあどうなってるんだー…………」

「すこじょ、をわってみて熱くない？」

彼女はゆつゝとお湯こてを伸ばす。

「温かい、すゞいなビリ火を燃やしてるんだ?」

火を、そうか火はおこせたのね、と言つとは、お湯大丈夫じゃない。

「じゃあ頭にかけるよー」

バシャツバシャと楽しそうにシャワーをあびあて、シャンプーやリンス、石鹼の香りに驚ながらも楽しもつに笑ひ、まるで小さな女子。

でも辰徳の話が本当ならもう一十歳前後の年のはず…見た目は背丈も小ちこしあつと若くみえる。

「姉さん、ハサミおことくよ」

「ああ、ありがとわ」

そつ言つて辰徳は脱衣場からでていつた。

「なあ、あいつは私達とは違うなどうしてだ？」

「違う？」

「あいつは、声も、顔も、高さも、違う！胸なんてペちゃんこでかたいんだ！」

「ああそれは、辰徳が男の子だからよー。」

「男の子？」

「そつかのぞみちゃんは男の人をしらないんだ」

彼女は大きく首をかしげている。
どう説明しよひ……。

「動物達のオスとメスはわかるのかな？」

「わかる」

「それと同じで人にも男の子と女の子がいるの、私達は女の子辰徳
は男の子」

「そうか、 そうなのか！ すごいな！ 何もかも初めて見るものばかり
だ！！」

「なあ人間はあと何人くらいいるんだ！」

「彼女が目をギラギラさせている。

「うーん、 分かりやすくいえば星の数ほど」

「星の数？」

「ナハ、夜空に輝く星へひここりまー。」

「えつ?ええええええそんなこいるのか?...すいじ...ゆいこなー。」

「!」

「ナハ、ニッパー。」

その頃僕は疲れていつとつとしていた。

「辰巳きこひるの。」

ああ聞こてるよ母さん、でも跟ぐで…。

「かなえ…」

「寝言かじり、迷惑…」

「母さん疲れてるんだろ？ 少し休ませてあげなさい。」

「お父さん？」

布団

「ねえ、お父さん元徳の話しほどかしら?」

「さあな、明田病院に行けばわかるんじやないか」

「かなえちゃんが……なんだか信じられない! もし本当ならあの男……」

ガラガラー・

「あがつたわよ、つて元徳寝てるじゃなー!」

「かなえちゃん……」

母さんとお父さんほどても驚いた表情でのぞみちゃんを見てくる。
「母さん、のぞみちゃんよー! 私も正直ビックリしたー・髪を切って顔
がみえたからそつくりです!」

「マイ、マイの器用」

卷之三

「ん? やはり、のぞみちゃんがママに会つくりだからみんなビックリしちゃうの」

「私がママに？」

のぞみちゃんは恥ずかしそうに笑っている、そんな顔もかなえちゃんとそつくりで心が痛くなる。

「なあ、ママの所に行こー！」

「のぞみちゃんママね今は、体の調子が悪くて違う場所で眠つていいの、だからのぞみちゃんも今田ま、つてこつても必ずいべ朝だけど、休んでママがあきた頃に会つに行つ

「えつ？でも…」

「大丈夫必ず会えるから」

のやみちかんは迷わず下をむいた。

「ママ、具合悪いのじてたせっぱつらかったんだ…ママが起きたらい出来るんだな？」

「うそ、約束！」

「ひょ、ちじ」

そつまつてのやみちかんはその場にねこりんだー！

「のやみちかん、いいなべて布団で寝よつー。」

「ふとさへ。」

「えりと、とにかくこいつを…」

のぞみちゃんは口クリとつなぎいた。

「あー…まつて、のぞみちゃんたちの飲み物もつてきてあげる」

そう言つて母さんが台所へバタバタとむかつづ。

そして、のぞみちゃんは母さんが持つてきたジュースを嬉しそうに飲んだあと私と一緒に部屋をでた。

「あーにな、あーこじだらけだ……」

部屋に向かつ途中で突然のぞみちゃんがどびはねる。

「やうだよね、のぞみちゃんはこれからもうといろんな体験で本当に大変かもしねいね…」

「たいけん？」

「なんでもない、ほりこーが寝る場所だよ」

そこには大きな布団が一枚ひいてあつた。

「うう？」

私は部屋に入り掛け布団をもちあげた。

「のぞみちゃんここに横になつて」

のぞみちゃんはゆつくつと、布団をふまないよつて、ぐるりとまわって私の隣にせつてきた。

「大丈夫、これが布団つていいって、とても暖かいの、たあのつてのぞみちゃんがゆつくり布団に体をおいた。

「うわああああああああ、なんだ柔らかくて気持ちいいー。」

「でしょーーそして、」の掛け布団をかけたらあつたか！

「うわああああああああーー！」

「今日は私も隣にいるから何があつたら起こしてね、お休みなさい」

そつと私は部屋の電気を消した、しばらくのぞみちゃんは興奮してこるようで布団の中で暴れていたけど、やはり疲れていたのだから、今はぐっすりと寝てしまった。

夢

「ああー、たつのんあとだしだしたー」

「してないよー。」

「したあーー。」

「じゃあ、もう一回なー最初はグージャンケーン

「かなえー」

遠くの方から声が聞こえた。

僕とかなえは声のする方へ顔をむける。

「お母さんー。」

かなえのお母さんが元気よくてをふつてこむー。

いつも優しいかなえのお母さん、僕はかなえのお母さんが大好きだつた。

「おばれーご」

僕も体全体をつかって腕をふった。

あれ？隣に誰かいる？

「辰徳君、かなえと遊んでくれてたの」

そいつ言ひはじけてきた、おばさんが僕の頭をなでてくれた。

「お母さん、今日はお仕事じゃなかつたの？」

「うん、あのねかなえにお話があつて帰つてきたの」

かなえと僕はお互いの顔を見つめあい首をかしげた。

「「」んにちは」

突然おばさんの隣にいた男の人が話しかけてきた。

「「」んにちは」

僕とかなえは小さな声で返事をする。

「「」めんなさい、辰徳君今日はちょっととかなえとお話があるから、
また遊びにきてね」

「はい、じゃなかなえ」

「「」ん、バイバイ」

おばさんとかなえ、そして男の人が一緒にてをふつている。

あの人は誰なんだろう？

ちょっとと顔がこわかつたな。

次の日

「たつのん」

「かなえ！」

かなえの後ろから低い声がきこえる。

「おはよう、えっと」

「辰徳君だよ」

かなえの隣には昨日の男の人気が立っていた。

「おじちゃん、もう大丈夫だから帰つていよいよー。」

「そうかい、じゃあ5時に迎えにくるからね

」

そう言つて手をふりながら男の人気が帰つていった。

「かなえ、あの人誰?」

「……。」

「かなえ?」

「新しい…お父さんなんだって」

「えつ?」

えっ？あれ？真っ暗だ。

どうしてしまったんだ！

「かなえー、かなえ」

えつへ・たひ ものねじわえ

「さやあああああたつのん助けてー」

かなえがおじさんにおわれてるー助けなきやー

体が動かない！

あれ？届かない！

「たつのん、たつのん、たつのーん」

「たつのん、どうして、助け……て」

「...ひめさ」

「辰徳！辰徳！！」

はああああああつ！

「はあ、はあ、ゆめ

「辰德大丈夫？」

「母さん」

「どうやら僕は夢をみていたようだ、それは早い、二つの間にか眠つていたんだな。

「母さんのごみちやんは？」

「大丈夫、のぞみちやんはお姉ちゃんと一緒に寝てるから」

「やつ…」

僕はほつとした。

「それより、辰徳大丈夫なの？まだ早いからもう少し休みなさい…」

「あ、ああやつあるよ母さん心配かけて」「めん」

母さんは首をよこにふりながらゆっくり立ち上がる。

母さんつらそうだな、子供の頃からかなえをしつてゐからな、母さんも辛いんだね。

「母さんも休んでくれよ」

「はいはー」

かなえまつてくれ、みんなをつれていいくもつすぐあえるからな。

食事

8時…。

結局いろいろと並べ事をしてしまい、そのまま眠れなかつた。

ガラガラ

「おせよ〜」

「あ、姉ちゃん、おはよ〜」

姉ちゃんがまだ寝たまゝに目をこすりながら部屋にはいった。

「姉ちゃん、」めんなんか全部まかせてしまつて

「こ〜わよ、それより元徳あんた会社にもひやんと連絡しとおなさ

「うー

はああああああっ！…泣かれてた！

「おまえ

姉ちゃんのよこからひかりと姿を見せる少女の姿に僕は驚いた。

「かなえ…一えつ？…おみけやこ…」

「お前もか

のぞみけやこは苦笑いしてこうる。

「昨日もママにソックリって話してたのよ

「あ、やつなの」

ガラガラ

「あら、みんなおはよっ」

「幽也さん、父也さん」

「の、やみうりちゃんはよひへ、よく眠れた？」

「ねえよひ、すいべく氣持ちよかつたぞーふとんっ…だっけ」

そつまつて首をかしげながら姉ちゃんをのぞきこむ。

「やひ、やひ、布団よ」

彼女がここでじとわらひでいる。

「やつ、よかつたー。じゃあ、ママの所に行く前に朝ごはん食べましょ」

やつ言へばやつをかり廊下中ここにあいが広がつてこる。

「私も手伝つわー。」

やつ聞つて姉ちゃんが台所へバタバタとむかった。

「のぞみちやんはしつかり座つて

僕は手招きで彼女をよんだ。

彼女はトコトコと僕の隣に座つてゆっくり僕の方に顔をむけた、正直あまりにも学生時代のかなえにそつくりで胸がドクリと音をたてた。

「なあ、ママ体の調子が悪いんだろ？」

「えっ？あ、うん、そうなんだ」

のぞみちゃんはとても悲しそうに下をむく。

「大丈夫だよ！また元気になれるよ

のぞみちゃんは「クリと頭を上下した、そんな彼女に僕はゆっくり頭をなでることしかできなかつた。

「おまたせ」

姉ちゃんと母さんが机の上に料理をならべはじめた。

「朝からおーい量だな……ってか僕冷蔵庫空っぽだつたはずだなー」

「俺が買い物にいったんだよ」

「父ちゃん」

「なんだこれ、すいべっこにおこだ

かなえと彼女はいったい山でどんな食事をしていたのだろう。

「さて、いただきましょつか」

「の、やみうらやんせ、フォークをつかつてね」

やつはつて母さんは彼女にフォークを手渡した。

感覚

不思議な感覚だ。

家族がそろつのもどれくらいぶりかな。

姉ちゃんが結婚して、僕は一時仕事で出張も多かった、そんな生活の中で年を重ねた両親を心配した姉ちゃん夫婦が、両親を自分達の家にまねいて、それから僕はこの広い家で一人で暮らしていた。

みんながこの家にあつまるのは何年ぶりだろう。

「辰徳ぼうっとしなこで食べなさい。」

「えつーああいただきます」

ふと、横に田をむけると彼女が朝食とひらひらとしている。

「のぞみちゃん？」

「これ、全部食べれるのか？こんなのは初めて見るぞ」

「大丈夫、食べてみて」

彼女はゆっくりと手をのばした。

「あつまつてーのぞみちゃんこれ使って食べるんだよー。」

僕はフォークを手に取り、お手本を見せた。

「手じゃダメなのか？」

「ん~、食べ物が熱いからね、それにこれを使えば手が汚れないだ
う」

「そうか?私達は熱くても手で食べてたけど
でもそれ使ってみる。」

そして、彼女はゆっくり食事を口に近づけんだ。

「――――――――――――――

彼女の動きがとまる。

「のぞみちゃん…?大丈夫?」

「なんだこれ?美味しい――――――――――――

みんなこっせこはッときわらつた。

「こっせこはべてね

「ううううううううううううううううう、おーしーーー！」

「おみちゃん食べ終わったらママに会ここいわ
さひじて元で沙由も感動してこんなよひだ。

「わかった

彼女がほっぺにじり飯をこっせこつけて笑つた。

笑顔

朝食をすませてバタバタとしたくを始める。

何事もなかつたように、みんな笑顔で話をしている。

父さんや母さんそして姉ちゃんは、のぞみちゃんに心配せない為什麼だろうな。

そして、僕とのぞみちゃんは…かなえが元気になると信じたくて、自分の気持ちをごまかす為に不安を消したくて笑っているのだろう。

かなえの痩せてガリガリの姿を僕と彼女はしつているから…。

大丈夫、かなえは元気になる、いやきっともうなってるはずだ！

かなえが元気になつて退院したらこいつぱい見せたい物もある、話したい事もある！

だがその前にあのおじさんをどうするかだな。

「ぶつぶつ

「向をぶつぶつ言つてゐる、早くこくよ

「あ、ああ」「めん」

「うして僕達は病院へむかつた。

病院でまつてるかなえが、笑顔でまつてくれていると。

信じて。

疑ひとすらせず。

しかし、

僕達は…

このあと

元気なかなえに会えることは

なかつた。

不安

病院にむかう途中、携帯電話が音をたてた。

「お、山本からだー。」

僕はあわてて電話をとった。

「もしもし山本、今お前のいる病院こむかってるんだ

「お前、」の数日向してたんだー何度も連絡してもつながらないー。」

山本はなぜかくじへ怒つてこる。

「うめん、いろいろあつたんだ、わやんと会つて話すといふつて

「とにかく、急いでこい！」

そう言って電話を切られてしまった。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

「どうしたの、大丈夫？ 誰から？」

母さんが心配そうに話しかけてくる。

「山本から、大丈夫何でもない」

やめてくれよ、大丈夫だよな、大丈夫だよなかなえ！ かなえ、元気になつたんだろ。

かなえ…。

「母さん…病院ついたら僕が先に様子を見てくるよ、歸るまでは」と
まつてくれない！

「辰徳…何かあったの？」

「そうじゃないよ、ただ彼女病院知らないしさ、かなえが治療つけ
てゐ姿みたらビックリするかもしないし…点滴なんか見たりきつ
とビックリすると思わない？」

「やうね、確かに針が刺さつて管もつこてるものね」

「だひ、それに山本にもちゃんと説明しないといけないからや、少
しだけまつててよ」

「わかったわ

僕はへりふと横をむいた。

「のぞみちゃん、今からママでこに行くんだね、僕が先に行って
ちょっと様子を見てくれるかひつとまつてくれない?」

「いやだ! 私もいへ

彼女が僕につかみかかる。

「のぞみちゃん、お母さんはね病気だから今はその病気と戦ひ為して
頑張ってるんだ

「わかってる! でも私も一緒にいへ!」

「今ママがいる所は病院と言つてね、それママを助ける為の場所
なんだ、だけどそこはねママの体の具合がよくなないとママとはあわ
せてもらえないんだ

「どうして?...」

「ママを守る為なんだよ、だから僕が会えるかどうか先に聞いてくれから、少しだけ姉ちゃんたちと一緒にでまつて」

僕の腕を強くつかんでいた彼女の力がゆっくりとれていく。

「大丈夫、きっと会えるから」

そう言って軽く彼女の頭をなでて、僕は車をおりた。

「じゃあ、彼女をよろしく、連絡するから」

「わかったわ」

そして僕は病院に向かって走り出す、その足は不安で小刻みに震えていた。

感情

病院の受付を見つけてかけよった！

「あ、あのー」

「はい」

走ったせいなのか、不安のせいなのか、言葉がつまづいて出でこない！

グイー！

「うわあ？」

突然腕をつかまれた！！

「うひちだ」

「山本…」「山本先生…」

「彼は僕の知り合いだから！」

山本は驚く受付スタッフに一言告げて僕を引っ張つて行く。

「山本、痛いよ…」

僕の問いかけに返事はなく、ただスタッフと引っ張られていく。

ガチャ！

「入れ！」

「ここは？」

「いいから入れ！」

僕は背中をドンとおされる。

「山本、悪かったよ！でも事情があるんだ！」

「はあー」

山本が大きくため息をついたあと、またゆっくりと息をすいこちる。
を見る。

「わかつてるよ！あんな状態の彼女をほつしていくんだよほどの事情
があるんだろ？！」

ひにくな言い方をする山本。

「あんな状態つて、かなえは、かなえは元気なんだろう？」

「……」

「おい！山本……！」

僕は声を張り上げた。

「彼女は、もう助からない……」

全身の力が抜けていく。

「今彼女は必死で戦つてると、自分の時間と……」

「……」

山本の声が遠く、遠くから聞こえてくる。

「お前と、娘を……必死に。」

グイー！

「今はへたばつてる場合でも、感情にひたつてる場合でもない！早く娘つれてきて彼女にあつてやれ！」

そして、僕は後ろへつづきとばされた。

僕は走った、彼女の、のぞみちゃん所へ！
かなえ！かなえ連れてきたから！

もう少しじだから！

かなえ！

「ねえ、あれ元氣じゃない？」

「あら、本当！何だかあわててない？」

僕は彼女のいる車へ、無我夢中で走っていく。

ガチャーー！

「来てーーー！」

そつと聞いて僕は彼女の手をとり病院へ向かう。

「辰徳ーーちよーとー、びひしたの？

「辰徳ーー！」

誰の声も聞こえない。

彼女も何も言わず、必死で僕についてくる。

そこに握られた手が言葉以上の感情伝えてくるかのように、強く強く握りかえされた。

病院に走る一人。

病院の入り口で山本が待つていてくれた。

「山本、かなえの部屋は?」

「ついてこい」

山本は僕達をかなえのもとに案内してくれた。

「HCU…」

山本が止まつた先にかかれた部屋の名前だった。

山本はくるりと振り返り、のぞみちゃんの肩に手をあててしゃがみ

「なんだ。

「君が彼女の娘さんだね？」

「娘…？」

「山本、彼女あまり言葉がわからないんだ」

「さうか…のぞみちやんだね！君に伝えたまわらなければいけないことがあるんだ」

「山本…」

「なに？？」

彼女は冷静に返事をする。

「君のお母さんはない」、「お母さん？ママの事か？」

「ああそりだよ、もうそんなに長くは生きれないんだ…」

「…」

のぞみちゃん…。

「山本いきなりそんな話し…」

「大切なことだ…」

突然のぞみちゃんが大声でどなる。

「わかつてるよ」

「のぞみちゃん…！」

「わかつてゐから会わせてー。」

山本はゆうくつと立ち上がる。

「ついておいで」

僕は正直驚いている、彼女はかなえの死をしつかりとつたために

こんな知らない所につれてこられて、知らない人に死を知らされるー！

僕が逆の立場だつたら絶対理解しようとも、信じよつともしないだ
う。

きつとパニックで騒いでいたかもしれない。

そして僕と彼女は山本の後を

おった、扉が開く！

中では聞きなれない機械音が響いている。

ペジペジペジ…。

これは…。

山本が止まつた先には、まるで別人のような姿をした彼女がベッドで眠つていた。

そんな彼女の体にはいろいろな機械が取り付けられていた。

嘘だろ、これがかなえなのか…。

医療器具にかこまれた彼女の姿は、まるでテレビの世界のよう…。

これが現実なのか？

の『あみあやん…しまつた』こんな姿の彼女をみたら絶対に動搖するだ
れど、「ママになんてことするんだ！」と黙っているに違いない！

しかし、彼女はあわてぶらぶらしながら近づいてくる。
「…」

「あみあやん…」

僕が彼女のもとに駆け寄りついた瞬間、山本の手が僕の視界へと
びこんできた。

「山本…」

「黙つて…」

「…」

の『あみあやん…』などは、かなんえに近づくと、かなんえの手を握った。

「アヤ、アヤ、アヤ…」

「かなえ…」

「のぞみ…」

「アヤー。」

かなえが小さな小さな声でのぞみがさひめののかなえ、びへいと
を開くが、そのままで焦躁がまだまつていなかつた。

涙

かなえがゆつくつとのぞみちゃんの手を握り返すのがわかつた。

「のぞみ…」めんね

「何が？」

「いわいですよ？」

「ビックリはしたけどね、大丈夫！」

のぞみちゃんはかなえとたんたんと会話をしている、笑顔で…まるでかなえに何事もないように。

彼女は理解しているのだろうか？

山本の言葉を、そして田の前にいるかなえの姿を…。

「たつのん…」

「えつ…かなえ呼んだ?」

細く小さなかなえの声が聞こえた、僕はあわてて彼女のもとへかけよつた。

「かなえ。」

「「めんね…」

「なに言つてるんだよー。」

かなえの声が僕の心に響く、溢れる感情が押さえきれなくなるのがわかる。

「そんな声だすなよーかなえはやく元氣になつてくれよ、話したい事が…や、山ほど…」

涙と溢れでる感情で言葉が出てこない！

かなえ…。

「「めんね…たつのん」

「あ…あやま…ら、なー、で…」

その時だった。

のぞみちゃんが突然立ち上ると僕の腕を強くつかみ、僕は彼女に引っ張られる。

「あ、のめみがんがん。」

僕はそのまま、彼女に引つ張られて部屋をでた。

「のめみがんがんじうしたの？」

グイー！

「えーー。」

おもこいつきつぱりまれぬき寄せられぬー。

「何で泣く？泣くなー。」

「……………えー。」

「ママをこれ以上苦しめるなー。」

突然怒鳴りだす彼女に僕は驚いた。

命

「の、のぞみちゃん！」

「ドンーーーーーー！」

僕は彼女に突き飛ばされる！

「この世に生まれてきた命は、いつかは死んでしまうんだ…だけど、たつた1つだけの自分だけの命はみんな、みんな大切でなくしたくないんだぞ」

のぞみちゃん…。

「だけど、それ以上につらい思いをするのは、目の前にいる命が悲しい顔をした姿を見ることだって！わかっていても自分の死を自覚させられる恐怖とか、その命をのこして死んでしまつ悲しさで死が…うけいけ、られ」

「のぞみちやん。」

彼女の目には大粒の涙と、強く握りしめた手が震えていた。

「私の友達はいっぱい…いっぱい死んで…でもママが言つたの、泣いてはいけないって、泣くのは見送つてからでもできるって…」

「埃及」

彼女はわかつていたんだ、誰よりも…、そして彼女の友達はきっと山の動物達だろう…そうだな動物の命は人より短い、彼女はたくさんの友達と別れてきたのだろう、そして今度は一番愛しい人…。

そんな人との別れでも、彼女は最後までその人の気持ちを守りうっていたのか…。

「ええむぢゃん...」るん

僕はそつと彼女に近づき彼女を抱きしめた。

かなえの死

僕達は涙をぬぐい、かなえのもとへむかつた。

しかし…

部屋に入った…

僕達が目にしたのは…。

かなえは、たくさんの看護師さんと山本にかこまれていた。

「ママ…」

あわただしく動く人々…。

僕達はあわててかなえのもとへかけよった！

「ママ、ママ、ママ」

「山本！かなえは？」

山本がゆっくり首をふった。

「かなえ…、なあ山本、嘘だろー頬むみ助けでくれよ…」

「かなえ、かなえ！かなえ――――――」

「ママ――――――」

「こんな」「ひとつ、こんな」「ひとつないだろー」

生きていたのにー。

僕は確かに見たんだ、かなえの笑顔を…

かなえの涙を…

僕は聞いたんだ、かなえの声を…。

これからもつと、もつと聞かざると思っていたんだ。

かなえの笑顔を声を、未来をーー

「辰徳、残念だが……」

山本が僕の前で首を横にふりながら云ふられた言葉

そんな……そんな……そんなー！

「こんなことって、こんなことって、ないだろー。山本ー。こんなこと
つて……」

山本が僕の両腕をぐつとつかみ、力強くゆさぶられる。

「気持ちはわかる、だが今お前がとりみだしたら、彼女の気持ちは
誰がすくうんだ！しつかりしろー。彼女をのぞみけやんの心をお前が
すくつてあげるんだ！」

僕は震える体を押さえ込み小さくうなずく。

「わかつてゐる……わかつてはいるんだ、すまない山本

「う、一番つらいのは彼女……」。

「おみちゃんママとは別れ、しな、へへへ……おみちゃんママとは別れ、しな、へへへ……」

唇を噛み締めながらのぞみけやんに語りかける。

「ママ、ママ、ママ

今彼女こは僕の声は届かない、彼女はかなえのそばを離れまいと
はしなかった。

そんな彼女の頭をゆっくりと抱きしめる。

「かなえ、彼女は僕が守るから、絶対守るからー。」

そして僕は、かなえに抱きつけるべのぞみけやんと抱きしめた。

「おみちゃん、僕は君のママと約束したから、僕が君を守るから

…

「辰徳…」

ふと、後ろを振り返ると家族があわただしく近づいてくる。

「辰徳…まさか…」

「母さん、うさぎ…息をひきとったよ…」

「おみちゃん…」

母さんが彼女のそばにかけよつてこぐ。

「辰徳、大丈夫?」

「姉ちゃん…」

僕は、あふれでる涙をとめることできなかつた…。

部屋に鳴り響く機械音に、かなえの鼓動はもつ響かなかつた。

「ねえ、ママ……どうしてこの場所をえらんだの？」

「…………。」

「ママは山が嫌いだったの？」

「…………。」

「ねえ、ママ……私が一人になるから？私はこんな所嫌いだよ、ママ
といった場所が一番好き……」

「ママ、一緒に帰る……山帰る。」

「ぞみちゃん。」

のぞみちゃんはかなえのそばを離れようとしなかった、それどころか僕達の声を聞いてもしない彼女。

スタスタ。

山本…？山本がのぞみちゃんの横に行へと、ゆりくつと腰をおひこ、のぞみちゃんの視線にあわせるよつて座つた。

しかし、のぞみちゃんは山本の方を見よつとはしない。

「のぞみちゃん、君に渡したい物があるんだ、ママからあずかつてたんだ」

「何？」

のぞみちゃんはの顔色がかわる山本に飛び付き山本はバランスを崩した！

「うわー危なこよーのぞみちゃん落ち着いてー辰徳お前もこーー。」

「えつ？僕も…」

僕はいそいで山本のそばに行く。

「ほひ、じゅぢがお前でじゅぢがのぞみけやんにだ」

「じれ…何？」

山本が手渡してきたのは、僕とのぞみちゃんの名前が書かれて
いる真っ白な封筒だった。

「のぞみちゃん、自分手紙だと感づよ~。」

「てがみ？」

「手紙ついでなのよ、文字で相手に自分の気持ちなんかを伝える方
法だよ」

のぞみちゃんが大きく首をかしげている、せまいわからないうな。

「のぞみちゃん、これにはママの気持ちがたくさん込められているんだ！ ださび今の畠でまだこの手紙を読むことができないだろ？」

「三本……？」

「囁いてこる意味がわからない？」

「そうだね、今はそれでいいんだ

「よくなーーこれはぜひこう物なんだーーママはなんでこれを私とあいつにしたーー」

「のぞみちゃんママがね、その答えをじつたければ、篠の囁きを聞くべくおとづれられたんだ。」「

かなえが…山本に。

「君のママが伝えたい気持ちを教えてくれるのは恩徳なんだよ

…。ママの気持ち?」

手紙

彼女を説得している山本や、家族たちに小さく頭を下げ僕はそつと部屋を離れた。

僕は扉の横に座り込みかなえの手紙に目を当てた。

「相変わらず小さな字だな……」

お前の字は読みにくいと何度もケンカをしたのを思い出す。

僕は封筒の中身をそつと取りだし、震える手を押さえ手紙をひらいだ。

たつのんへ

もつ時間がなくて…

字も上手に書けません。

なので詳しい話は山本君に話をしています。

ただ…

これだけは、私から伝えたい大切な気持ちなので。

のぞみを助けて下さり、よろしくお願ひいたします。

「かなえ…」

小さな字が震えるように跳つっていた。

何やら封筒の中にまだ何か入っているような?

「あれ?」

僕は封筒をひっくり返してみると、すると」と小さく折たたまれた小さな紙が一つ。

たつのんへ

今も昔もやはりあなたはカッコいいね。

最後に大好きなあなたに会えてよかったです。

「……ハハハハハハ、やつと認めたな、おせーよバーカ……」

かなえ……。

かなえーお前僕の事大好きだろ?

はあ？まさか

嘘つけ！カッコいい！って思ってるんだから？

ないない！

バカなやつとはいつも思ってるわよ！

照れんなって！

…バカなやつ！クスクス

「かなえ…僕はちゃんと言えなくて…」めんな…。

僕はそつと涙をふきとり静かに祈りを捧げた。

かなえ…今も昔もやはり大好きだ。

部屋の中からのぞみちゃんの呟き声が聞こえてくる。

僕はのぞみちゃんのいる部屋へ戻っていく。

「辰徳どこにいったんだ？ 彼女をこのまま置いておくわけにはいかないんだ、のぞみちゃんを説得してくれー！」

「ああ……」

「うるさいー私はママを止めて帰してー！」

僕はバタバタと暴れるのぞみちゃんの腕をグッと引っ張りあげるー！

「痛いー！」

「あ、おこなはる徳?」

「山本、母さん、姉ひやん、父さんかなえをお願い」

「長徳さんへいへの?..」

家族や山本が心配そうな顔で僕をみているが、僕は頭を下げその場から離れた。

「離せー痛いー!」

「.....。」

「ママー、ママー、ママー!」

無理やり彼女を引きずる姿に回りの視線が突き刺さる、まるでこれが
じゃ誘拐してるみたいだな。

「のぞみちゃん、ママに会いに行くんだついて

「ふやけるな、ママはあそびにい

「いや、生きてるかなえに会ってくんだよ

「生きてる……お前に加減にじろよー。」

「ここからつこてきて

そして僕は半ば無理やり彼女を車に乗せて病院を離れた。

「どうして？」

「家や、かなえの」

「ママの?山に帰るのか?それならママと一緒に戻ってー。」

「ねえ、のぞみちゃんはママの事をどれだけ知っているの?..」

「どれだけ?全部知っているに決まっているだろ?..」

「じゅあ、ママが止まらないでいた事も知ってるんだい?..」

「はあ?何をこうして?..」

「ハハ…その言い方かなえソックリだ」

彼女は不愉快そうな顔で僕をにらんでいる。

「おぢみちゃん、僕はママと約束をしたんだ、だから少しだけ僕の話に付き合ってくれないか？」

「話？ママと何の約束をしたんだ？」

「ううだね、その前にちょっと前を見てくれないか？」

「前？」

僕は大きな角を曲がると徐行運転で走り出す。

「ほひ、おぢみちゃん」「が昔かなえ…ママが住んでた家だー」

「えつ……向を叫んでるママは止でずっと私と一緒にだったんだが

「そつ、だからのぞみちゃんが生まれる前だよ

「生まれる…前？」

そして僕はそのまま車を走らせる。

「おー、ここはお前の家だろっ。」

「そう、正解！僕とママの家はすぐ近くで僕は子供の頃からママと友達だったんだ」

「友達？」

「ああ、のんちゃんおつて、かなえに会こに行くよ

「お前ふざかるなー。」

僕は車をおりて彼女のいる、助手席に回り込み彼女を強引に車からおろした。

「痛いっー。」

「わかつてるよ、でも今の君はこうしたことついてきてくれないか
うー。」

僕は彼女の腕を引っ張り家に連れ込みリビングに座らせた！
「何するんだー！」

怒る彼女をよそに僕は探し物を始めた。

「これと、これ、あとこれも

ドン！

「キヤア！」

「あ、」めん前が見えなくて

そういうて僕は彼女の前にたくさん の アルバムやビデオテープをあげた。

子供の頃

「まずは……これを見て！」

「これはね、アルバムって言うんだ！カメラって機械でその時の風景なんかを残すことができる……って言つても難しいかな？」

彼女は瞼みつかんばかりに僕を睨み付けている。

「のぞみちゃんそんな怖い顔しないでよ、ごめんねやつぱり先にこれみて！」

僕は近くにおいてあつた手鏡を彼女に手渡した！

「……こんどはなに？」

鏡をうまい手にした彼女が急にかたまつてしまつたー。

「どうした？」

「ママに会いたい…もつがこの…」

「ハハハハ！ ここに立つてーるのは初めてなんだよ

「私？」

彼女は鏡を必死でさわりながら、自分の写る姿に驚き、顔や手を必死で動かし確認している。

「そして、これは携帯って言つただけどカメラもついてるから、のぞみちゃんに向いて！」

「ハハ、驚きました、この顔だなー。いつって僕は写真と動画をとつていいく。

「 もう もうから向こうへね。」

「 今は動画をとつ いるんだ」

「 動画?」

「 もう、 口で説明するまつせよこからー。」

「 … ?」

—
—

「 もう…じゃあ しれみてー。」

「 もう もうからなんなんだ? なにがしたい?」

「 ここから、 番ひ」

僕は携帯を彼女の方へむけて再生ボタンを押した！

「さつきから何してる？、今は動画をとっているんだー。」

「…………これ？わつきの私達ー！何でー？』

「今はこんな事ができるってことだけ理解してくれるかな、ゆっく
り説明している暇はないんだ！それからこれが写真ね』

「これは……。』

彼女はビックリしそうたのか、頭がついていかないのか、口をポカ
リとあけてだまつこをんでしまった。

「さてー！これで写真と、動画は分かってくれたかなー！じゃあのぞみ
ちゃん、さつきのアルバムにもどるよ、この写真みてー！これ誰かわ
かる？』

僕はアルバム開き[写]真に指を描した。

「これは……お、お前に少し似てる小さこ人…子供か?」

「そう、これは僕が小さい頃の[写]真だよ」

「……これはお前なのか?」

「そうだよ、そしてこの人は?誰かわかる?」

「…………さつき渡された、かかみ?の中にいたわたし」

「ハハ鏡だよ、確かにそっくりだけどかなえなんだ!」

「ママー」「れはママなのか?」

そう言つて彼女はまた鏡をのぞきこみ、アルバムの中のかなえと見比べてゐるようだ。

「のぞみちゃんこの後ろに写つてるのは僕の家だよ、わかるかな?」この写真はね僕とかなえの子供の頃の写真なんだ」

「…………ママ。」

呆然とするか彼女、きっと今は頭のなかぐしあがうつな。

だけど頑張つてついてきてくれー僕は次にビデオを再生する。

「ほい、今度はさつきと同じ動画だよーそして昔の僕とかなえだー!」

「ママ。」

彼女は大粒の涙を流しテレビにはりついている、僕はしばらくの間そっと見守ることにした。

「ピートオからかなえの声が聞こえてくる…。

「このピートオはかなえがいなくなる前にとられたものだ…。」

そう、この時にはもうのぞみちゃんがお腹の中にいたんだ…。

僕は…。

なぜ気づかなかつたのだれらうか…。

かなえは心から笑つていないじやないか！

悩んでたのに、僕が気付いていればかなえは、山には行かずここでのぞみちゃんを産んだかもしれないじやないか…。
かなえ…。

「おい、かなえ！何してる！」

「まつー

「あ、かなえおじさんだぞ

「ひ、ひ、ひ」

僕はあわててビデオのコントローラを手に取りビデオを止めた！

「ひ、ひ、ひ……ママ、ママが消えたー・ママが消えたー

のぞみちやん…。

「お前か、お前何かしたのか？」

「い」あん、見てられないで消しちゃつたんだ

のぞみちゃんが僕に飛び付いてきた！

「うつーもう一度ママにあわせてー。」

「……のぞみちゃん

「お前が見せたんだー。」うつれてきて見ゆとしたのはお前だ
「ー。」

「……ああ

僕は震える手でうつと再生ボタンを押した。

ビートオの続きが流れはじめる…。

かなえの顔は悲しみにみちていた…。

何で…僕は全く気づいてあげられなかつた…

僕はその場に崩れ落ちた。

カメラをまわしていた僕は、最後までかなえの寂しそうな背中をとつていたのに…。

ザザー！

「おい！いい加減にしろ！また何かしたな

「いや…もつ、今まで終わりなんだ…」

「終わった……」

「ナハル」

ザザー！

「ハラ、ハラー。」

「お前、泣いてるのか？」

「かなえ、じめん、かなえ……」

「な、な、ママがママとおしゃべりするの？」

「うう…かなえ…」

ザザー！

ザザー！

「たつのん

えつ…？

「アアア…まだ終わってなこじやないかー！」

えつ？ 終わったはずのピートオからかなえの声が聞こえてくる…。

なんで…？

「たつのん…えつと、この映像が見られてるかどうかわからぬ…」
「…えつと」

かなえ…。

「私には大切な人が出来ました…この子を守りたいのだけど…きっとそれは出来ないとと思うの」

「だから、私は最後までこの子と一緒にいてあげたい…って何の事かわからないよね、ハハ…」

「なに言つてるんだらうつて思いながら聞いてほしいの…そつ、えつと、夢…夢の話をします！」

「えー。タイトルはのぞみちゃん…ドー…」

「私の…名前…」

「たつのん、私にはのぞみちゃんって言う大切な人ができました、そしてね、私はのぞみちゃんと、たつのんと一緒にいつまでも笑顔で笑いあうの…」

「そして、私はのぞみちゃんに「お話しのー」のぞみちゃんちゃん
と、たつのんの話すことを聞きなせー! だってたつのんはあなたの
…」あー、私なに言つてるんだろう、ハハ夢のお話しでしたあー」

かなえ
。：

「たつのん、元氣でね。」

ザ
ザ
ー

ザ
ザ
ー

かなえ。
：

かなえ、君の夢…

わかつたよ…。

ひとり

「のぞみちゃん、ママとちちゃんとお別れをしてお墓に入れてあげなくちゃいけない」

彼女は下をむいたままつづいた。

「だから、はしゃぐ上に連れて帰る。」

僕はゆきへじ首を横にふった。

「ねえ、のぞみちゃんかなえはひつちで黙りさせてあげたいんだよ

「えつ？」

「のぞみちゃんのママはかなえだよね、かなえにもママがいるんだよ、そして…かなえのママはもう「くなってしまったんだ…」

「ママ……ママ……

「やつ、かなえのママ……かなえはね、ママが亡くなつたことを知ら
ないんだ……のぞみちゃんがママを大好きな様にかなえもママが大好
きだったんだ

「…。

「だから、せめてかなえを……かなえのママと一緒に墓に入れであ
げたいんだよ

じめじく黙りこむ彼女からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。

のぞみちゃん

「わ、かった

「…。

「おつがとう」

必要で涙をぬぐう。

とても強こ子だ。

「それともうひとつ

彼女はゆっくりと僕に顔をむける

「のぞみちゃん、しばらくはここで生活してみたいかい

」

「ああ、のぞみちゃんかなえはさ、自分の命が短いとわかっていて、あんなぼうぼうの体でこんな遠くまで必要で歩いて来たんだ！」

「…。」

「必要で必要で…途中で倒れてもおかしくなかつたのに、必要で僕に助けを求めてきたんだ…のぞみちゃんのために…」

「私の？」

「さう、君の為にママは自分の命を削つてでも僕の所にやつて來たんだーそして、かなえは、最後に僕にこいつ叫びたんだ

「娘を助けてほしつつてー」

「ママが…どうして！助けるってなんなんだ、なんで私は助けてもわらなくちゃいけないんだ？」

「…まあ、めぐらしがちなんだかうらやましかったんだ…」

「…うう…」

「もじ、近づきなきと手を握つておらず、葉を選んで話して…。」
「…そして僕は彼女に近づきなきと手を握つておらず、葉を選んで話して…。」

「…むしろ、我が家に連れて行へから、少しだけ頑張つてかなえが生きた
のなら、世界を見てみないかい？」

「…じばりく考へこんだ彼女が僕の手を強く握りかえして真っ直ぐと僕
の皿を見て言った。

「…ママと話がしたかった…」

「わかつた」

そして、僕たちはもう一度病院へむかつた。

ひづる？

「山本迷惑かけたな

「いや

僕は一人病院にのこつていた。

「彼女は？」

「のぞみちゃんか？彼女の事は母さん達にたのんであるから、それに今頃はかなえと話し合いをしてるだろうから

「話し合って」

あのあと僕らは病院に戻り、かなへは家に引き取る事になった。

「ああ、そう彼女が言つてたから……」

「？？」

山本が突然ポンと僕の肩を叩く。

「今日はもう帰れ、すゞ」に顔してるぞーそんな状態で今晚もつのか
?なんなら診察してやるぞー。」

「ハハ、いろいろな事が一気に重なってまだ頭がついていかないん
だ、それに警察からの事情聴取だら…何がなんだか」

「かなえちゃんには捜索願いが出されてるし、当時は自殺したと思
われてたからな…」

「 ああ」

「で、これからどうするんだ?」

「わかんね、とつあえずかなえはおばさんと同じ墓に入れてあげよ
うと思つたが……」

「おじゆる…か

僕は言葉に反応するかのよつて攀せられてる。

「だが今まどここのかわからん、なぜそれが亡くなつてから一度も見たことがない」

「ああ

「のんみちやん…はへ…びりゅうね..」

「それを今頃かなえと話してゐるやー彼女にこいつで暮らすと話たりしたんだ、そしたらママに話したいって言わたよ、山に帰す訳にはいかないし、何とか説得しなきゃいけないよ

「やつだな、とつあえずこいつあつすきだ一度頭の整理が必要だ
な

山本がため息まじりで壁によりかかる。

「そうだ、かなえから何か聞いてるんだろ？手紙にそう書いてあつたから」

「ああ、今度ゆつくり話すよ！俺の仕事が休みの時にもなー今はとにかくゆつくりしろーって言つても出来ないだろ？が…」

「わかつた、じゃあ行くわ！」

「ああー！」

山本が手をあげるのにあわせて僕も頭を下げた。

「あいつフラフラだな…大丈夫か？」

そして、僕は病院を後に、自宅へと車をはしらせた。

決めた

僕は疲れた体で車を車庫にまわした。

今でもリリバーを見ると思い出す、かなえの姿…

僕は車をとめると、庭にある桜の木にむかつた、かなえがいなくなつてから一度も桜の木に近づかなかつたのに…。

体がかつて歩いているようだ。

母さん達が出ていつて以来、何のていれもしなかつた庭は草だらけで、その中にひときわ大きく立つ桜の木…。

「かなえ…お帰り…」

僕はそつと桜の木に手を添えた。

「ここから見る景色はすごいなー。」

！――――えつ？

突然聞こえてきた声に驚き辺りを見回す！

「お前もここよー。」

？？上？

僕は声の聞こえる方へ顔をむける。

「か、かなえ……」

木の上には真っ白のワンピースをきたかなえの姿が……いや

「のぞみちゃん」

「ん？ なんだ？」

何て所にいるんだ！

「危ないよ！」

「何がだ？」

ハハ、山育ちだもんな！

「よし！僕も行くよ！」

僕は桜の木にしがみついた！

「が…！」

「くそおーやつぱり昔のようこはないかあ～」

僕がすつたもんだしながら登つてこると、手がせじのべられた。

ドキッ！

かなえ…。

「何してん？お前木ものぼれないのか？」

彼女は声を出して笑つてゐる。

僕は彼女の手をとつて必死で登ついた。

「あー簡単には登つたのになあ～

「ハハ、ママも同じ事言つてたで

「かなえが？そつか、昔ねよくかなえとの木に登つてサクランボをとつてたんだ」

「アリなのか

「それにしてもビックリだよ、本当に君はかなえにそつくつだー。」

「アリか？」

彼女がそつと顔に手を当てた

「ああ、それにその服もよくあつてる

「ふく？」

「それ、昔かなえがよく着てたんだ

「ママが…」これさつきかしてくれたんだあの人達が…

「母なんだな、それはかなえが僕の家に泊まりにきたとき用だつて
いつもおいてあつたんだよ」

「ん？」

彼女が首をかしげている、ハハ本当にこれから大変だよな…。

「よくわからないけど、あれ見て」

そうじつて彼女は町の方へ指さした！

「みるー。これは別にお屋をまがあんなにこっぽい…

さうじて彼女が首をかしげた

「のぞみちゃんあれはね、お屋をまじやないんだよ」

「なんか、もう首とれそうだね」

「？？お前の言つてるのはよくわからない？」

「ハハ、だよねー。やつべく教えてこくよ

やはり、首をかしげる彼女、その姿もやつぱりかなえこそつくりで不思議な気分になった。

しばらく僕たちは街の灯りをながめていた、すると彼女が大きくなめ息をついている。

「のんみちゃん？」

「ママとなお話したの」

「うそ」

「ママね全く返事してくれないのー当たり前だけど…何度も何度も
聞いてるのー…」

小さく鼻をならす彼女…

「のぞみちゃん…」

「自分で決めろってー!だから自分で決めた!」

ガラガラー!

ぱたぱたー!

「のぞみちゃん、のぞみちゃんーん

「のぞみちゃん」

何やら家のほうが騒がしい、すると家から母さんと姉ひやんが慌ただしく走ってきた！

「のぞみちゃん」「のぞみちゃん」

「母さん、姉ひやんじたの？」

「えつ？辰徳じー？」

僕は桜の木を揺らして音をたてる！

「あやあやーーー木？」

僕は下にいる一人に手をふった

「ああああああーーいたのぞみちゃんもーる

母さんがぺたりと座りこんだ！

「母さん大丈夫？」「母さん…」

はっ！

「まさか、のぞみちゃん監に向も言わずに出てきたの？」

彼女は口クロクと頭をふった！

「なるほど、それでか！」

僕は慌てて木をおいて、さつと彼女に手をのべた。

「おいで

彼女は僕の手をとつて木をおつる。

「私、ここに残る

「えつ？」

僕の横をスッと通りすぎた彼女。

彼女に皆が集まっていく。

「よひじく／のぞみちゃん」

僕は心のなかでそう呟いた。

ジューク

のぞみちやんがひからに残ると決めてから4日がたとつとしている。

彼女は今僕の皿の前でひたすら恋をあけしめしている、もうこの作業を何時間彼女は繰り返すのだろう？

「ねえのぞみちやん、楽しいかい？」

彼女は一いつをチラリと振り向くと大きく飛びはねながらよろこんでいる。

「ここは本当にいいなー」の壁なんて回しが見えるし、中と外では料節が違う。」

そう、どうやら彼女はヒアロノド涼しくなった部屋と外の気温の差に驚いてくるようだ、しかし、いつも開け閉めされたすがにエアコンの音も悪い。

「のぞみちゃん、暑いよ~」

「お前大丈夫か？中は寒いくらいだぞー。」

はあ～さすが山育ちだ。

とにかく今は彼女の好きな用にやらせてあげようと僕は思った、ただでさえ知らない物に囲まれた世界だ、彼女のストレスは大変なものだろう。

「なあ」

「何？」

彼女が窓を閉めて僕の方へ近寄ってくる、それも恐ろしいほど笑顔でだ！

「何だよ？」

彼女は体をくねくねしながら僕を見つめてくる、このポーズで近寄ってくるときは必ず何かをおねだりしてくる、なんて分かりやすい子なんだ。

「あのね、あれがほしい」

「あれじゃわかりません！」

彼女が「むう」とした表情で僕を睨み付けるが、何とも憎めない顔で。

「ほら、飲むやつー冷たくて美味しいの」

「だから、それはなに？」

「むう～

「むう～じゃないだろ、教えただろ」

彼女はバタンと寝そべると、ゴロゴロと暴れはじめる、これが彼女の考えるスタイルらしい。

「ん～

彼女がほしい物はわかっている、ここに来て初めて口にしたジュースがどうやら大のお気に入りらしい。

「ヒントをあげよう、最初は「じ」だよ」

「じ、じーー、ジャイ！」

「何だよジャイって……」

「ジャモン、じまあ、じ、じー」

はあ～…。

「正解はジュースですか？」

「ジュースー、ジュースー、ジュースー」

本当に子供だよ。

「よし、今日自分で入れてみようか！」

「自分で？」

そうこうして僕は台所にむかい、彼女もあとを ピン ピン ピン とこぐらへる。

「はい、これ冷蔵庫！」

「冷藏庫？」

きつとずつあるものだし存在は知っているだろうが、彼女が冷蔵庫を触るのは初めての事だ。

「せこ、じゅ ロックセイジにあるから冷蔵庫開けてみて」

彼女はゆっくり冷蔵庫に近づくと扉にてをかけた！

「あれ？ 空かないぞ？」

「もつと、グッと弓がなくてやー」

「わかつた！」

次の瞬間！扉がぶつ飛びそうな勢いで開き反動でまたおもいつきり閉まってしまった！

「こわつ！ 冷蔵庫こわつ！」

「違う強すぎなんだよー。」

しかし、なんて力してんだこの子は…。

買い物

しかし、何にも入ってない冷凍庫だな…。

…………。

「どうした？」

彼女は嬉しそうにジュークを飲みながら僕をのぞきこんでくる。

「ねえ、買い物いこうか？」

「かい、もの？」

「うそ、買い物に行ひー。そいつと決まれば準備しなくひー。」

「のんみうちやんー。トイレに行つてきて、外では多分難しいだらうか
「ひー」

「わかつた！」

彼女は一つ一つ毎日が勉強で、毎日質問で始まり質問で終わる、毎日が刺激的で大丈夫かと心配になるくらいだ。

「いいぞ！」

「よし、じゃあ行こう」

僕は隣町にある少し大きなショッピングモールに車を走らせた、その道中僕は彼女に必死で話をする。

「いいかい！今から行くところはとても人がいっぱいいる所だからね！迷子になつたら大変だから絶対僕から離れないこと！」

「わかつた」

「それから、いろいろな物があるけど大声はダメだからねー！」

彼女はコクコクと頭をふっているが、本当に大丈夫だらうか…。

ショッピングモールに近づくにつれてだんだんと人がふえ、まわりが騒がしい雰囲気になつてくる、ふと彼女に目を向けると彼女が車のガラスに張りついて外をみていた。

「のぞみちゃん、いいんだけどさ…もう少し窓から離れない？ 皆がビックリしてるから」

「ん？ そつか？ それにしても、本当にこんなに人がいるんだな」

「はは、こんなもんじゃないよ」

「そつか、すごいな！」

本当に大丈夫だらうか…確かに人がふえてはきてるがまだ、まばらな状態だからな興奮しなければいいが。

しばらく走り続けると彼女がピタリと引っ付いてくる、やはっこわいのだらうか…。

「のぞみちゃん、せつめいしてつか?」

「…………。」

返事がない。

「のぞみちゃん?」

僕はあわてて彼女の顔をのぞき込んだー。

あれ? ね、寝てる。

なんだ、僕はホント胸をなでおろした。

確かに車に揺らされると眠たくなるしな、僕は少しだけ遠回りをしてショッピングモールにむかった。

「のぞみちゃんー。」

「の、みちゃん…ついたよ」

ゆっくりと目を開けた彼女が突然体を大きくのけぞった！

「な、何？」

「も、ひ、暗いぞ私そんなになってしまったのか？」

ああなるほど。

「違うよ」これは建物の中だからね、駐車場つていつて車を止める所だよ」

「駐車場」

「そ、ほら車がいっぱいだ」

「ほ、本当だ」

「さて、行くつー。」

そう言って僕達は車をおりた、あとは絶対に彼女を迷子にしないことだーもし迷子になつたら大変なことになるー。

ん?

ふと横をみると彼女が僕の手を握つてきた。

「迷子になるからなー。」

そう言つてこいつと笑う彼女、なんて可愛いんだろう、思わず僕もこいつと笑い返す。

僕達は手を繋ぎお店へと入つていく、時折すれちがう人を興味深げにみているがどうやら怖がつてはいないうで安心した。

「いいかいのぞみちゃん、今からエスカレーターの上

「えねかるねーた？」

「エスカレーターね、動く階段だ、僕の足にあわせてのるんだよ」

「よくわかんなーナゾ、一緒にのればここんだな」

「アリス」

そう話をしている間にエスカレーターが田の前にせまつてきた。

「おおおおおおおおおおおおおお」

「ほり、のんみちやんーこくよーせーの」

彼女は足をもつらせながらも必死で僕についてくる、その姿が面白くて思わず吹き出してしまった。

「なんだ？」

「いや、「めん可愛いから」

そして僕はなぜかこうしてトトロしていく。だんだんと見えてくる店の中には彼女はどんな反応をするのだろうか？

「…………」

「ひみちやん…ほら次はおつるよーせーの

「のんびりかたまつてしまつたよつだー

彼女がピタリと立つて立つて立つ。

「ひみちー?」

「こや、よくわからぬい

「大丈夫だから」

彼女は「ククク」とうなずくが、握りしられた手のひらからは彼女不安が伝わってくるようだ。

しかし…数日後

「わああああああああ！」

「わああああああああ！」

「わあああああああ！」

ハハ…大丈夫みたいだね、しかしのぞみちゃん声でかいよ…。

「みる、みる、なんだこれは？なんだなんだ？」

やばい、これはひょっとして質問攻めにあうパターンじゃないだろうか！

「の、のぞみひやん…落ち着いて」

「お、おひ

そつ言つ彼女の鼻は全開に開いてる、大丈夫だろつか。

とりあえず刺激が強い所は避けて歩いつ。

「さて、買い物するか今日なに食べたい?」

「何?なんでもいいのか?」

「あ、いやせつぱつこーせ

「何だよー聞いといで」

彼女の食べたい物はここには売っていないからな、山にいたとき食べてた物を聞いた思わず倒れそうになってしまった事がある。

「なあ、リリにあらむもの全部食べ物なのか？」

「ん、ああそうだよ」

彼女の目がまた飛び出しちゃうだ。

「これは？なんだ」

「これは？これは？これは？これは？これは？これは？これは？これは？これは？」

やばー」「これは？」地獄がはじまつたー！

「あー、これは知ってるが」

そう言つて彼女はキノコを手に取つた

「ああそうだね、山にまキノコまにまえてるだらう」

すると彼女はキノコを開けて食べようと見てる。

「だあああああああ！」

「な、なんだビックリするな」

「ダメ、食べちゃダメ！」

「ん？」

やると思つたやるとは思つてた！

「あのね、のぞみちゃん一家でゆくつて説明するから今はせつと聞いてほしい」

彼女が大きく首を傾けながら聞いている、彼女はこの世界に来て、ほぼ毎日このポーズだ！いつかむち打ちになるんじゃないだろうか。

「いいかい！」ではまず欲しいものをこのカゴに入れてレジと言う所に持っていくんだ、そしてお金ってのがあってお金と交換して食べ物をもらいうんだ」

「…………うん」

ダメだわかるはずないよな。

「どうあえず今は食べちゃダメー！」

「わかった。」

「ついで僕達は買い物を続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9060x/>

世界を知らない少女

2011年12月20日19時47分発行